

The background of the cover is a textured, light beige paper. It features large, expressive brushstrokes in deep red and a muted blue. A thick red stroke curves from the top left towards the center, while a blue stroke curves from the top right towards the bottom right. Another red stroke is visible at the bottom center. The overall style is minimalist and artistic.

飾り火

〔下〕

連城三紀彦

飾り火
〔下〕

連城三紀彦

著者紹介

連城三紀彦（れんじょう みきひこ）
本名 加藤甚吾。1948年1月11日愛知生まれ。早稲田大学卒。昭和59年、「恋文」にて第91回直木賞受賞。著書に、「戻り川心中」「宵待草夜情」「恋文」「花墮ちる」など。

かざ 飾 り 火〔下〕

1989年4月15日 印刷

1989年4月30日 発行

著 者 ^{れん}連 ^{じょう}城 ^み三 ^き紀 ^{ひこ}彦

編集人 沢 畠 毅

発行人 川 合 多喜夫

発行所 毎 日 新 聞 社

〒100-51 東京都千代田区一ツ橋

〒530 大阪市北区堂島

〒802 北九州市小倉北区紺屋町

〒450 名古屋市中村区名駅

印刷／精興社

製本／大口製本

© Mikihico Renjō, Printed in Japan 1989 〈編集担当 石倉昌治〉

ISBN 4-620-10387-X

飾り火(下)

目次

第二部

黒い針

5

湖底の火

68

落花

153

燃える雪

242

飾
り
火
〔下〕

装
幀

村上
みどり

第二部

黒い針

チャイムを鳴らし、ドアが開かれるまでの間、美冴はドアのルームナンバーの数字をただ見つめていた。何も考えることができなかった。疲れ果て、頭の芯が痺れ石のように鈍くなっている。それなのに体の中に嵐となりそうな不思議な騒ぎが起こっている。ホテルの廊下の静寂に閉ざされ、美冴はそんな自分の体をうるさく感じていた。

ドアが開かれ、顔が覗いた。夫の芳行は小さく肯くと、すぐにその目をそらした。

広い部屋だった。ダブルベッドと黒檀を想わせる重々しい机とおかれ、実際にはベージュの品のいいソファが対い合っておかれ、そこだけが小さな衝立で区切られ、ちよつとした応接間といえる空間になっていた。

夫はその一つに座り、まだそらしている目の言いわけのように煙草をとりだして喫いはじめた。

そんな夫の顔を美冴の側では食っているように見つめ続けた。三鷹駅で別れてからまだ三日しか経っていないのが信じられなかった。長旅に似た遠い無意味な回り道をして、今やっと夫は目の前にいる。それなのに三鷹駅での電車のガラスよりもっと分厚いガラス越しに夫を見ているような気がしていた。

「食事はまだなのか」

夫はそう尋ねてきた。風邪でもひいたように声がしゃがれていた。

「それは私のほうで訊くことだわ。食事はもう済んだんですか」

結婚してから夫の帰りが遅くなるたびにもう何千回となくくり返した言葉である。夫は何も答えない。美冴は部屋を見回した。何も荷物らしいものはない。部屋のキーだけがベッドの端に投げだされている。妻と話し合うためだけにこの部屋をとつたらしい。

「今日、岸森さんに会って全部聞きました。私、何も知らなかった」

美冴はそれだけしか言えなかった。まだ続けたい言葉はあつたのに、あとはため息にすり変わった。

夫はやつと美冴の顔へと視線をねじつた。三日前と同じ背広を着ている。紺の背広はくたびれて皺が寄っている。顔にも同じ疲労の皺が目立った。妻を真正面から見つめてきた目も徹夜したかのように充血している。この人、もう何日も眠っていないんだわ、きっと。ぼんやりとそんなことを考えていた。

「岸森から全部聞いたというのなら、俺からはもう何も説明しなくていいだろう」

夫はそう言う、上着の内ポケットから薄い紙をとりだして美冴へとさしだしてきた。折りた

たまれたその紙を、美冴は自分の手で広げた。

離婚届である。黒いインクですでに夫の名と保証人二人の名が書きこまれている。保証人は二人とも美冴の知らない名前だった。妻が名を記す欄だけが空白になつていたが、印鑑はすでに捺おされている。夫は次に万年筆をとりだしてさしだしてきた。何も口にしなかった。『離婚届』と乾いた活字で記された三つの文字だけが、今、夫が二十三年間の妻に語ろうとしている言葉のすべてなのだった。

美冴はその用紙を夫のほうへ押し戻した。

「私が岸森さんから聞いたのはあなたが何をしたかだけだわ。一人の女のためにあなたが会社を棄て地位を棒にふつたこと、それから家庭や私も棄てようとしていること。——何故あなたがそんな真似をしたか、岸森さんもわからないと言っていたし、私にもわからないんです。それを説明してください」

自分の声とは思えない静かな声で言うと、美冴はもう一度、さらに夫の方へと離婚届の用紙を押し返した。

その指だけがかすかにいら立ちで震えている。体の中に依然騒がしいものがあつたが、それはつきりと怒りの形をとらず、不燃焼の煙を吐いてくすぶっている。依然、美冴には、目の前の他人同然の冷たい顔をした男より二十三年間の夫の方を信じようとする気持ちが強かった。そんな自分が美冴にはいら立たしかった。

「誰にでも起こることだ。特別な理由なんかはない」

「私と離婚して、その女と一緒になるつもりなんですか」

「――」

「自分の息子にも手を出した女と一緒になるなんてことが誰にでも起こることなんです。岸森さんから聞きました。あなたが会社を辞めたのは女が仕組んだことだって。そんな女と一緒にすることが誰にでも起こることなんですか」

言葉は激しながらも気持ちも声もいよいよ冷え固まっていくな。

「昨日の晩、雄介が死のうとしたこと知ってるんですか。睡眠剤を飲んで手首を切って。発見が遅れていたら本当に死ぬところだったんです。知ってるんですか、そのこと」

夫は小さく肯くと、その話題から逃げるように立ちあがり、背を向けて窓辺に立った。その背を、美冴は、さらに、

「自分の息子をそこまで苦しめた女と一緒になることが本当に誰にも起こることなんですか」
そんな言葉で追いつめた。

「その話はしたくない」

夫の声は不意に弱くなった。

「いや、他の話もしたくない。あの家も預金通帳もお前にやるし、しばらくは今までと同じ金額を月々送る。その他でもお前が何か条件があると言うのなら、できるだけそれに応える。だからこれ以上は何も訊かずに、その用紙に署名してくれないか」

美冴は夫の背に向けて首をふった。午後には岸森から話を聞いた時にも夫がわからなかったが、今すぐそばにいる夫が、その時以上にわからなくなっている。後ろ姿になると細く見える首もわずかに右の方がさがって見える肩も、腰や腰からの線も、二十三年間に知らず知らず憶えこんだ

ものだったが、今は夢の中の他人のもののような空ろさでしか、その背は美冴の視線に應えてこない。手を伸ばせばつかめる距離にいる夫の何もつかめないもどかしさにいら立って、美冴は夫が灰皿に残した煙草をつかむと、震える指に力をこめてもみ消した。

「私の条件は一つだけです。今から、その女をここへ呼んでください。そうして今日までにあったことを全部話してください」

夫の芳行は何も答えない。大きな窓のむこうに東京の夜景が原色の灯を無数にちりばめている。眩しい原色は、夫の背を無彩に見せた。いつもより、その右肩の落ちているのが目立ち、ひどく頼りなげに見える。何故そんなふうに頼りなく見えるのか、それすら美冴にはわからなかった。

「女を呼べないなら、電話番号を教えてください。私のほうから会いにいきます」

「会ってどうするんだ」

「今日まで何があつたのかを全部聞きたいんです。あなたは自分の口で話す勇氣はないんでしょう？」

「そんな話を聞いてどうするんだ」

「その話を聞いて納得がゆけば……、離婚のことを私も考えてみます」

「離婚？」

芳行はふり返り、顔を歪めた。耳慣れない言葉を聞いたかのような口だった。美冴には自分を詰るように睨みつけている夫の目の意味がわずかも理解できなかった。自分から離婚届をさしだしながら、妻が離婚という言葉を口にするのを非難しているときか思えなかった。離婚しろと言いがら、妻が、「もう一度やり直したい」とか「私の所に戻ってきてください」とか答えるのを期待

していただろうか。それではあまりに勝手すぎる。夫の目の奥を覗きこもうとしても美冴の視線はぷつんと切れてしまう。夫と再会するのは三日ぶりではない。考えてみると、今年の二月から夫の気持ちを覗こうとしながらそれが恐くて目をそらし続けていた。いや結婚してから夫とも真つ正面から対い合い見つめ合うのは初めてのことなのではないか。美冴の焦燥は、だが、怒りにまで高まらず、むしろ夫の目に怒りが感じとれた。

「話を聞いたところで、お前が傷つくだけじゃないか」

「傷ついたほうがまだましだわ。今のような宙に放りだされたような気持ちより。あなたの言っていることは普通じゃないわ。何の理由も説明せずに離婚届をさしだせば、私が黙って名前を書くと思っただけですか」

芳行は視線を不意に遠のかせ、美冴の前に座り直すと、しばらく無言でいたが、やがて肯くと、
「そう、そう思っていた」低い声で言った。

「離婚には簡単に同意してくれと思っていた」

夫の当然のような顔に美冴は呆然として首をふった。

「私をそんな人形のような女だと思ってたんですか」

「いや、俺が黙っているのはお前のためを考えたからだ。だがこうなったらもう仕方がないな」

夫は深いため息をつく、ポケットから角型の封筒をとりだし、それをふった。中からどきりとこぼれ落ち、それはテーブルの上に散らばった。写真である。二、三十枚はあった。

「雄介が自殺しようとしたのは俺だけの責任じゃない」

美冴より先に、芳行は写真の一枚を手にとると、暗い視線をその写真へと絞った。

「だから俺は何も言いたくなかったんだ。雄介だってお前には何も言わなかったんだろ。――
相手は雄介より若く見える青年だな」

美冴が最初に手にした一枚には、村木の顔が鮮やかなカラーで写っている。微笑したその顔と貼りつくようにして美冴の笑った横顔がある。次に取った写真では、長浜のホテルから二人が出てきて同じように楽しそうに笑いながら、車に乗りこもうとしている。その次は同じホテルの夜の窓に並んだ二つの影がとらえられている。男の影が美冴の着物を脱がせようとしているのがはっきりとわかった。

「このすぐ近くのホテルを使っていたらしいな」

夫はそう言つて二枚の写真を投げてきた。一枚はホテルの回転扉へと美冴の後ろ姿が吸いこまれていく写真であり、もう一枚は駐車場から二人の乗った車が吐きだされてくる写真だった。

「ホテルだけじゃない。お前はその青年を叶美の家庭教師として家にまで連れこんでいる」

夫がまた投げてきた写真には、家の門から叶美たちと並んで出てくる村木の姿があった。美冴は床に落ちた一枚を拾いあげた。紫陽花に青紫に彩られた石段と二人の背がのぼっていく。鎌倉に行つた時の写真だった。

「それが興信所から最初に受けとつた写真だ。その少し前からどうもお前の様子が変なので興信所に調べさせた」

夫の声は事務的な乾いたものに変わっている。美冴は夫の顔からもテーブルの写真からも目をそむけ、

「ずっと知つてて黙つてたんですか」

それだけを何とか口にした。唇が震えてそれ以上言葉を続けられなかった。

「お前だつて俺のことを知つて黙つていた。そういう夫婦だつたんだな、俺たちは」

他人事のように言い、夫はもう一度深いため息を吐いた。

「だから誰にでも起こることだと言つたんだ。お前はさつき俺が全部を話す勇氣がないように言つたが、お前のほうにはその勇氣があるのか。この青年をここへ呼んで最初から今日まで何があつたかを全部俺に聞かせる勇氣があるのか。長浜のホテルや新宿のホテルで何をしていたかまで全部——」

夫の冷静な声が、今度は逆に美冴を追いつめはじめた。美冴はテーブルの上に視線を戻した。今まで村木と關係をもちながら、美冴にあつたのは年齢差の負い目だけで、罪の意識を感じたことはなかった。若い男の情熱に押し流され四十三歳という半端な年齢の淋しさを埋めた夜は、それなりに美冴にとってはかけがえない美しい夜だった。それなのにこんなふうに写真という形で切りとられると、二人の關係から罪の匂いだけが濃厚にたちこめてくる。無意識のまま犯していた罪の断片が、今、テーブルを覆いつくしているのだった。

「私がこういうことをしたせいで、雄介が自殺しようとしたというんですか」

「いや、もちろん責任は俺にもある。だが雄介は今でもまだ母親から自立できずにいるところがあるから、俺のこと以上に母親が自分とあまり年齢の変わらない若い男と關係をもつていたというのは大きな衝撃だつたと思う。雄介を死にまで追いつめたのは俺やその女というより、むしろお前なんだ」

「卑怯だわ、そういう言い方」

美冴は、写真から顔をあげ、やっとそう言い返した。

「あなた、自分にも責任があると言いながら結局は雄介の自殺の責任を私一人に押しつけようとしてるんでしょう。雄介ははつきりと、自分がこういう真似をすれば、あなたが女と手を切ってくれるはずだから、と言ったわ」

「あいつはただ俺に嫉妬してただけだ。俺から彼女を奪いとるために狂言で死ぬ真似をしてみただけのことだ」

夫は目をそらしていたが、語気は強かった。

「それが父親としての言葉なんですか……」

呆然として、美冴の声はため息と変わりなく細かった。

「俺はそう器用に父親と男とを演じ分けられない。お前のように器用にはな。片方でこの写真のような汚ないことをしておきながら、息子が自殺しかけたとわかると急に母親に変わって子供のことだけが心配だという顔をしたりはできないんだ」

美冴は顔を歪めた。

「汚ないこと？」

思わずそう訊き返した。声が軋きしんだ。夫が口にした皮肉の中で、その言葉だけが耳を突き胸を抉きった。

「あなたに何がわかるんですか。自分のことを棚にあげてこんな写真を撮とらせることの方がずっと汚ないじゃありませんか。私たちの関係の綺麗な部分はこの写真には出ていないわ」

喉がつまり泣き声になりにかけたのを美冴は必死に耐えた。今泣けば、村木との関係がこの写真

どおりの薄汚ないものになってしまいい夫との口論に負けてしまう、そう自分に言い聞かせた。

「だったらそれでいいじゃないか」

夫も顔を歪めたが、声は冷静だった。

「お前の方にも俺と彼女の関係の綺麗な部分はわからないだろう。だからおたがい、今自分の信じているものを選べばいい。お前は俺よりこの青年を選んだ。それでいいじゃないか」

夫の手が離婚届を美冴の方に押した。美冴は首をふった。会議や論争に慣れた冷静な声で夫は自分の問題を巧みに妻一人の問題にすり変えている、それはわかったが言葉を返せなかった。二人は顔をそむけ合い、しばらくたがいの息だけで見つめ合った。激しくなっていくのが自分の息か夫の息かわからなかった。美冴は立ちあがった。体がひとりでに動き、ベッドの枕もとの電話に近寄り、受話器をとっていた。

「どこへ電話するんだ」夫が立ちあがった。

「村木をここへ呼びます」

震える声を美冴は夫に投げつけた。

「彼の口から全部を聞けばいいわ。私たちの関係が本当に汚ないものかどうか。だからあなたもその女を呼んでください。その女に全部を話してもらおうわ」

すでに電話は村木の部屋につながりコール音が始まっている。だが次の瞬間、背後から夫が襲いかかり受話器はとりあげられていた。電話を切った後も、夫は美冴の体を縛りあげた手の力を緩めなかった。突然その唇が美冴のうなじに押しあてられてきた。

夫の唇が冷たい唾液の粘りとともに美冴の首すじの皮膚へと食いこんでくる。この瞬間それま